

資料

- ・字源は、『新漢語林 第二版』（大修館書店）で調べ、『広漢和辞典』（大修館書店）でそれを補った。また白川静『字統』（平凡社）も参考にした。
- ・手書きの字形については、江守賢治『解説字体字典』（三省堂）、江守賢治『楷書の基本100パターン』（日本習字普及協会）、および『大書源』（二玄社）を参考にした。

「横画の長短を明確に書き表さなければならない漢字」に関する資料

「壬」の形が内にある常用漢字（七字）

壬・壬テイ

壬と壬は、ともに常用漢字ではない。壬はほとんど使用されることのない字である。

任・賃・妊・淫・廷・庭・艇

任は人+壬（音符）の形声文字。壬は、長時間にわたって持続的にある重さの物を保つるの意味。人がなう・たもつ・もちこたえるの意味を表す。賃は貝+任（音符）の形声文字。妊は女+壬（音符）の形声文字。淫は氵+壬イ（音符）の形声文字。壬は爪+壬テイで、手をさし出し、進み出て求めるさまから、過度・はなはだしいの意味を表し、降りすぎの雨の意味から、ひたす・ふけるの意味を表す。廷は女+壬（音符）の形声文字。壬は、突き出るの意味。廷は、階段の前につきでた、にわの象形。にわの意味を表す。庭は广+廷（音符）の形声文字。艇は舟+廷（音符）の形声文字。

漢字の部分としての壬の字形は、壬に吸収されて、廷のように壬が壬に変化したり、呈のように壬が王に変化したりして、常用漢字には壬の形は残っていない。任は歴史的に「**任**」とも書かれてきた。

常用漢字の横画の長短

一本の横画の、上が短く下が長い漢字

二

仁・ニ・弌

工

恐・空・工・功・巧・江・攻・紅・貢・控・頃・左・佐・差・試・式・拭・尋・惰・築・虹

立

暗・位・意・韻・億・憶・臆・音・泣・境・鏡・競・響・宰・碎・襲・章・彰・障・憧・鐘・辛・新・薪・

親·接·淹·端·董·瞳·倍·培·陪·賠·避·部·壁·癖·壁·剖·闢·翠·拉·辣·立·竜·粒·籠

並

普·譜·並

共

異·共·供·恭·洪·港·選·戴·殿·爆·暴·翼

井

橫·黃·錯·散·借·昔·惜·籍·措·展·備

井

困·耕·井·井

缶

鬱·缶·陶

舌

搖·謠

矢

挨·医·疑·擬·矯·凝·侯·候·喉·矢·疾·嫉·族·短·知·痴

失

失·秩·迭·鉄

夫

規·溪·鷄·贊·潛·替·夫·扶

夭

奏

示

斜·叙·徐·除·途·塗·余

示

尉·慰·款·禁·襟·祭·齋·際·察·擦·示·宗·崇·踪·奈·粟·漂·標·隸

平

坪·評·平

半

半·伴·判·畔

于

芋·宇

干

干·刊·汗·肝·幹·岸·軒

丁

衛·街·桁·行·衡·術·衝

午

許·午

牛

解·牛·件

朱

株·朱·殊·珠

来

来

先

先·洗

生

告·酷·造

爻

教·考·孝·醇·拷·者·煮·暑·署·緒·諸·著·都·賭·箸·老

夕

勸·歡·觀·權

元

院·完·冠·玩·頑·元

云

陰·雲·会·繪·芸·魂·軫·伝·曇

亓

辱·唇·娠·振·震·農·濃

无

廢·發

开

開·刑·形·型·研

井

瓶·併·摒·餅

关

関·咲·送·朕

夹

峽·挾·狹

帛

制·製

亏

汚

亏

顎·誇

牙

牙·芽·雅·邪

无

慨·概·既

中

偉·達·緯·衛·韓·傑·降·瞬·舞·隣

卉

曉·燒·噴·墳·憤·奔

丰

奉・俸・棒

丑

羞

夊

卷・券・拳・圈・勝・贍・藤・騰

手

看・拳・擊・拳・擥・手・掌・摩

毛

尾・毛・耗

上の二本の横画で、上が短く下が長い漢字

頁

敢・蔽

缶

御・御

漢字の基本要素一示のように単独で漢字として用いられるものもあれば、示のように単独では漢字として用いられることはなく、漢字の部分としてのみ用いられるものもある―は、その基本要素が、漢字内のどの位置にあるかによつて、上下につぶれるなどして形を変える。そこに横画の長短の基準を作る難しさがある。例えば、工は漢字の上部にあれば「頁」のように二本の横画の長短が強調される字形になるが、「紅」のように漢字の右部にあれば、二本の横画の長短は不明確な（ほとんど同じ長さの）字形になる。しかし、いずれにしても字体（文字の骨組み）は同じと考えてよい。横画の長短にこだわる必要はない。また当然のことではあるが、漢字を字源の面から考察しても、横画の長短に必然性を見出すことはできない。それを𠂇（おいかんむり）を例に説明すれば、𠂇の二本の横画は上が短く下が長いが、字源的には「𠂇」だけではなく「匕」も含めた「老」全体が甲骨文（𠂇）でわかるように、腰を曲げてつえをつく老人の形で、象形文字である。金文（𠂇）、篆文（𠂇）で変形し、楷書の老になるが、二本の横画が何を表しているのかといえ、それはよくわからないし、ましてや二本の横画の長短の理由を字源に求めようもない。（白川静は老を𠂇と匕とに従う会意文字で、𠂇は長毛の人の象で、老髪を垂れている形、匕は匕の初文で、衰残の人をいうと『字統』で説明している。しかしそうであつても𠂇の二本の横画が何を表しているのかはよくわからないし、二本の横画の長短の理由の説明にならないことはかわりない。）また𠂇も部首は𠂇（おいかんむり）であるが、字源的には「𠂇」だけではなく「日」も含めた「者」全体が金文（𠂇）でわかるように、台上にしばを集め積んで火をたく形で、象形文字である。（白川静は異なる説明をしているが省略する。）もちろん者

の𠂔の部分の二本の横画が何を表しているのかはよくわからないし、二本の横画の長短の理由を字源に求めようもない。このように横画の長短の必然性を字源に求めることはできない。では𠂔（おいかんむり）の二本の横画の上が短く下が長いのはなぜかといえば、それは書き方の習慣としか言いようがない。習慣だからどうしてもよいということはいえないが、**老**や**者**と書いても他の字と識別ができて、ロウ・シヤと誰でもが読めると考えられるのであるから、𠂔の二本の横画の長短を漢字の正誤を判断するポイントにしてはならない。そう考えれば、ここまで挙げたものは全て下の横画を明確に長く書かなければならないというものではないと言える。

下の二本の横画で、上が短く下が長い漢字

里〔里は、田と土の会意文字。〕

黒・懂・鐘・童・瞳・墨・埋・黙・野・里・理・裏・量・糧・厘

重〔重は王+東（音符）の形声文字。意符の王は、人がつたっている形。音符の東（転音チヨウ）は、袋に入れた荷物の意を表す。原義は、人が荷物を負うて立っている意。引いて、おもい意に用いる。また東と土に従う会意文字。東は橐（ふくろ）の初文でその象形。『説文解字』では「王に従ひ、東聲」と説明しているが字形に合わず、橐の下に土をつけている形で、重量の意を示す。（白川）〕

勲・薰・腫・種・重・衝・動・働

聿〔聿は、手にしたふでの象形。〕

建・健・鍵・書・津・筆・律

莫

漠・嘆・難

里では、土は田と一体化して独立した形を保っていない。重の部首は里であるが、里とは意味の上で関係はなく、単に字形上から里の部首に入っている。**里・里・重・重・重**などと書いている。

上下の二本の横画で、上が短く下が長い漢字

厶

厶・惡

豆

艶・短・澄・豆・痘・登・頭・鬪・豊

車

連・較・轄・軌・揮・輝・軍・輕・擊・軒・庫・載・斬・暫・軸・車・陣・漸・転・軟・輩・範・輪・輪・

連

亘

垣・恒・宣

其

基・期・棋・旗・欺・碁

正

症・証・正・征・政・整

五

五・悟・語

互

互

三本の横画の、上が二番目に長く下が一番長い漢字

三

三

王

王・旺・環・玩・球・狂・玉・琴・現・皇・国・璽・潤・聖・栓・詮・全・徵・懲・珍・呈・程・班・斑・
璧・宝・望・理・璃・瑠・弄

主

往・主・住・注・柱・駐

主

喫・契・潔

生

産・生・姓・性・星・牲・醒・隆

羊

群・祥・詳・鮮・達・遲・羊・洋

差

義・儀・犧・議・差・羞・羨・着・美・察・養

虫

寒・溝・構・講・購・塞・壞・嬢・讓・釀

主

害・割・轄・憲・債・情・青・清・晴・精・静・請・責・積・績・素・漬・毒・麦・表・俵・麵

夊

夊

夊

春・奏・泰・奉・俸・棒

戔

栈・残・浅・踐・錢

丰

邦

丰

峰・蜂・縫

耒

耕・籍・耗

三は **三**（上の二本の横画は同じ長さで短く、一番下だけが長い）や、**三**（下の横画ほど長い）などと、春は **春**（三本の横画は同じ長さ）や、**春**（下の横画ほど長い）などと書かれてきた。

三本の横画が、下ほど長い漢字

金〔金は、土+ノ+今（音符）の形声文字。音符の今は、合に通じ、ふくむの意味。土の中の左右に書かれるのは、金属が土中にある形にかたどる。土中に含まれる金属の意味を表す。また銅塊などを鑄こんだ形。〕

『説文解字』に「五色の金なり」とし、金の土中にある形に、今声を加えた字とするが、字は今声に従うものではない。（白川）

銳・鉛・釜・鎌・鏡・金・錦・銀・鍵・銅・鉦・鋼・鎖・錯・銃・鐘・錠・針・銭・鍛・鑄・釣・鎮・鉄・銅・鈍・鍋・鉢・銘・鈴・鍊・録

並

靈

〔靈は、靈の省略体。〕

以下に挙げる漢字も字源からみて、この横画を長く、この横画はそれより短く書かなければならない、というようなものは全くない。過去にどう書かれてきたか、現在どう書かれているか習慣が問題となる。印刷文字字形に近い字形の字（**業・無・善・年** など）を書く人もいれば、伝統的な字形の字（**業・無・善・年** など）を書く人もいるし、少々癖のある字（**業・無・善・年** など）を書く人もいる。いずれにせよ、その書かれた漢字に識別性（他の文字の形とまぎれない）があり、誰が見ても同一の漢字であると認識できればよい。

下の二本の横画で、上が二番目に長く下が一番長い漢字

堯

勤・僅・謹

業〔業は、のこぎり状のぎざぎざの装飾をほどこした楽器を掛ける板の象形。〕

業

業〔業は、𠂇+𠂇の会意文字。𠂇は、先端に鋸形の刃のある器物。𠂇は、左右の手。𠂇を両手で持つて犠牲などを切りさくさまから、わずらわしい仕事の意味を表す。〕

僕・撲

四本の横画の漢字

手

扌

〔扌は扌+𠂇の会意文字。𠂇は、枝のしげった木の象形。邪悪なものを除くために、たまくしを手にしてお

がむの意味を表す。]

一本の横画が、上が長く下が短い漢字

㇇

監・艦・鑑・覽・濫・藍

「監は、金文は、臣+人+皿の会意文字。臣は目の象形。人が水の入ったたらいをのぞきこむさまから、鏡に写して見る意味を表す。」

㇈

献・幸・擘・執・南・報

「幸は手かせの象形。執が、手かせにとらえられた人の象形であるのに対し、手かせをはめられるのをまぬかれて、しあわせの意味を表す。 献は獻の俗字。」

㇇の㇇は人、一はたらいの水を表していると考えられる。南の㇈の横画は、印刷文字字形では上の横画が長い字形（𠄎）もあれば、下の横画が長い字形（𠄏）もある。幸の字は昭和二十四年の当用漢字字体表に示された字形と、菱形（𠄎）の考えが一つになって、幸のように上から三番目の横画を一番下（上から四番目）の横画より長く書くようになった。戦前まで小学校では**𠄎**と下の横画を長く書くように教えてきた。歴史的に見ても**𠄎**と書かれてきたし、中国の『新華字典』の字形は幸である。

その他

㇉

医・欧・殴・区・驱・匠・枢・匿・匹

巨

巨・拒・距

臣

監・艦・鑑・緊・堅・賢・臣・腎・臧・臟・姫・覽・濫・藍・臨

㇊

隱・穩・帛・急・侵・浸・寢・尋・雪・掃・当・婦

巨

虐

馬

馱・騎・驚・驅・駮・駒・騷・馱・駐・騰・篤・馬・罵

長

長・帳・張・髮

隹

維・雅・確・獲・穫・勸・飲・觀・携・權・雇・顧・護・催・雜・雌・集・准・準・焦・礁・進・推・隻・堆・濯・奪・誰・稚・鶴・難・奮・躍・唯・雄・擁・曜・羅・離

乍

詐・作・昨・酢・搾 印・暇

食

餌・餅

扌

鍛・段 興

非

罪・俳・排・輩・非・悲・扉 襲・籠

言〔言は辛十口の会意文字。辛は、取手のある刃物の象形。口は、ちかいの文書の意味。もし不信があるときはには罪に服することを前提とした、ちかい・つつしんでいうの意味を表す。〕

詠・謁・課・諧・該・記・議・詰・許・謹・訓・計・詣・警・謙・言・語・誤・護・誇・講・獄・詐・詞・試・詩・誌・諮・識・謝・諸・訟・詔・証・詳・讓・信・診・誠・誓・請・設・説・詮・訴・託・諾・誰・誕・談・調・訂・諦・討・膳・読・謎・認・罰・評・訃・譜・訪・謀・訳・諭・誘・譽・謠・論・話

無

舞・無

寿〔寿は壽の草書体による。〕

寿・鑄

善〔言十羊の会意文字。言は、原告と被告の発言の意味。羊を神のいけにえとして、両者がよい結論を求めらるさまから、よいの意味を表す。〕

善・膳・繕

兼

鎌・兼・嫌・謙・廉

天

蚕・天

𠂔

華・乗・剩・垂・睡・唾・郵

爰〔爰は、甲骨文は、ある物を上下から手をさしのべてひくさまにかたどり、ひくの意味を表す。〕

援・媛・緩・暖

得・脊・満・逋・年・承・那・気・汽・再・妻・凄・事・様・商・雨・葉・辛・新

雪・雪・雪、満・満、無・無は、常用漢字表の前書きに「書体設計上の表現の差、すなわちデザインの違いに属する事柄であって、字体の違いではないと考えられるものである」と説明されている。天は、戦前までの学校教育では活字の字形のいかんにかかわらず、**天** と下の横画を長く書くように教えられてきた。中国では歴史的に見て、初唐の楷書から上の横画が長い字形に書かれることはなく、現在中国で最も規範的な字典とされる『新華字典』の字形は、天と下の横画が長い字形になっている。蚕は、『新華字典』での字形は蚕。華も乗も「𠂔」の横画の長さは、

華(華)・乗(乗) のように一番上の横画が一番短く、上から三番目の横画が一番長い字形で書かれてきた。雨は、常用漢字表の前書きで、**雨** と上の横画を短く書き方を認めてい

る。当用漢字字体表（昭和二十四年）のまえがきでは尙も **尙** と書くことを認めていた。妻は **妻** と女の横画が長い字形で、辛は印刷文字字形とは逆に **辛** と下の十の横画が長い字形で書かれてきた。新を **新・新** と書くことは今日も一般的に行われている。

「必ず突き出さなければならない漢字」に関する資料

耳

耳・餌・取・趣・職・聖・撰・恥・聽・聞

常用漢字表・前書き・ㄅ字体についての解説・第1明朝体のデザインについて・2点画の組合せ方について・(4)交わるか、交わらないかに関する例に、**聽** **聽** とある。

耳は耳が偏の位置にある漢字（取・恥など）・旁の位置にある漢字（餌）・その他の位置にある漢字（撰・聞など）でも、単独の漢字としても **耳** **耳** と五画目の左下から右斜め上への払いの先が、縦画を突き出しても突き出さなくてもよい。

非

罪・俳・排・輩・非・悲・扉

常用漢字表・前書き・ㄅ字体についての解説・第1明朝体のデザインについて・2点画の組合せ方について・(4)交わるか、交わらないかに関する例に、**非** **非** とある。

非は単独の非でも、非を要素として持つ字（罪・俳など）でも四画目の左下から右斜め上への払いの先が縦画を突き出しても突き出さなくてもよい。

兆

兆・挑・眺・眺・逃・桃

兆の三画目の左下から右斜め上への払いの先が縦画を突き出すこともありえる。非の場合と同じく筆の流れである。

祭

祭・際・察・擦

常用漢字表・前書き・ㄅ字体についての解説・第1明朝体のデザインについて・2点画の組合せ方について・(4)交わるか、交わらないかに関する例に、**祭** **祭** とある。

爨

澄・登・麈・爨

爨の二画目・三画目・五画目も、祭と同様に突き出すこともありえる。

寮

僚・寮・療・瞭

寮の四画目・五画目も、祭と同様に突き出すこともありえる。

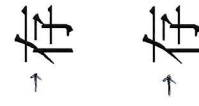
存

存・在

存は在_ㄣ十子〔孫〕（音符）の形声文字。在は金文では士+才（音符）の形声文字。篆文は、

士が土に変形した。

常用漢字表・前書き・(尗)字体についての解説・第1明朝体のデザインについて・2点画の組合せ方について・(4)交わるか、交わらないかに関する例に、**存 存** とある。



とある。

尗

考・孝・醇・拷・老

教

者・煮・暑・署・緒・諸・著・都・賭・箸

考は尗〔老〕十𠂔(音符)の形声文字。孝は子十尗〔老〕の会意文字。醇は酉十孝(音符)の形声文字。拷は扌十考(音符)の形声文字。老は象形文字。甲骨文は、腰を曲げてつえをつく老人の形をかたどる。篆文は、その変形したもの。教は攴〔支〕十孝〔𠂔〕(音符)の形声文字。𠂔は子十攴(音符)の形声文字で、攴は屋根のむねの千木のように物を組み合わせた形の象形文字。者は象形文字。金文は、台にしぼを集め積んで火をたく形にかたどり、にるの意味を表す。煮の源字。借りて、ものの意味に用いる。煮は灠〔火〕十者(音符)の形声文字。暑は日十者(音符)の形声文字。署は罒〔网〕十者(音符)の形声文字。緒は糸十者(音符)の形声文字。諸は言十者(音符)の形声文字。著は艹十者(音符)の形声文字。都は邑〔邑〕十者(音符)の形声文字。賭は貝十者(音符)の形声文字。箸は竹十者(音符)の形声文字。

常用漢字表・前書き・(尗)字体についての解説・第1明朝体のデザインについて・2点画の組合せ方について・(4)交わるか、交わらないかに関する例に、**孝 孝** とある。



「尗」の下のスペースが狭いために、その下に書く字の左上の端が尗の四画目の斜画にかかる(突き出す)こともあるということ。だが手で書かれた字を見るとほとんど突き出しているものはないようである。

身

窮・射・謝・身

常用漢字表・前書き・(尗)字体についての解説・第1明朝体のデザインについて・2点画の組合せ方について・(4)交わるか、交わらないかに関する例に、**射 射** とある。



身は単独の漢字としては**身**と突き出し、身を要素として持つ漢字(窮・射・謝)は突き出しても突き出さなくてもよい。

才

才・材・財・閉

材は木十才(音符)の形声文字。財は貝十才(音符)の形声文字。閉は門十才の会意文字。才も身と同様に単独の漢字としては**才**と突き出し、才を要素として持つ漢字(材・財・閉)は突き出しても突き出さなくてもよい。

𠂔・𠂔

糾・叫・収

糾は糸十𠂔(音符)の形声文字。叫は口十𠂔(音符)の形声文字。収は攴〔支〕十𠂔(音符)の形声文字。

収の𠃉も糾・叫の𠃉も、ひもがもつれ合っている形の象形文字で同じもの。しかし、収の𠃉は二画で、糾・叫の𠃉は三画。筆順も異なる。旧字体では収(收)の𠃉も、糾・叫の𠃉も二画。

(糾・叫の旧字体は、糾・糾・糾、叫・叫・叫などと辞典によつて異なっている。)糾と叫の𠃉は突き出す。収は現行の印刷文字の中には凸版書体のように収と突き出したものもあること、収を書く場合に二画目から三画目へと移るときに筆の流れとして二画目の先が縦画を突き出してしまふこともあるから、収と突き出さなくても、収と突き出してもよい。

ト

外・掛・赴・訃・朴

外はト+夕〔月〕(音符)の形声文字。音符の夕は、月の変形で、別に通じ、かきとるの意味。うらないのために、かめの甲から肉をかき取るさまから、はずす・その意味を表す。掛は才+卦(音符)の形声文字。卦はト+圭(音符)の形声文字。赴は走+ト(音符)の形声文字。訃は言+ト(音符)の形声文字。朴は木+ト(音符)の形声文字。

外のトは掛・赴・訃・朴のトと同じ。外は常用漢字表・前書き・ㇿ字体についての解説・第2明朝体と筆写の楷書との関係について・2筆写の楷書では、いろいろな書き方があるもの・⑥その他に、外・**外**・**外**とある。ト(常用漢字ではない)はトと突き出さないが、外だけは例外的にトと突き出して書くことがある。掛・赴・訃・朴のトの部分は突き出さない。

女

安・案・委・威・萎・姻・宴・媛・桜・嫁・嫌・娛・好・婚・妻・始・姉・姿・嫉・女・如・嬢・娠・数・姓・凄・婿・接・妥・嫡・妬・奴・努・怒・妊・婆・媠・妃・姫・婦・妨・妹・妙・娘・妄・要・腰・楼
常用漢字表・前書き・ㇿ字体についての解説・第2明朝体と筆写の楷書との関係について・2筆写の楷書では、いろいろな書き方があるもの・⑥その他に、女・**女**・**女**とある。女は単独の漢字としても、女が要素として漢字のどの位置にあつても(好・安・委・数・努・楼など)、二画目の頭が三画目の横画を突き出して突き出さなくてもよい。

叱

叱・叱

叱は口+七(音符)の形声文字。音符の七は、縦横にきりつけるさまを示す。口で切りかかる、しかるの意味を表す。叱は口+化省(音符)の形声文字。口を開くさま。

常用漢字表・前書き・ㇿ字体についての解説・第2明朝体と筆写の楷書との関係について・2筆写の楷書では、いろいろな書き方があるもの・⑥その他に、叱・**叱**・**叱**とあり、

『叱』と『叱』は本来別字とされるが、その使用実態から見て、異体の関係にある同字と認めることができる」と説明されている。

冊

冊・冊

冊は、文字を書きつけるために、ひもで編んだふだの形の象形文字。

冊

嗣・偏・遍・編・倫・輪・論

嗣・偏・遍・編・倫・輪・論の冊の部分は字源的には冊と同じである。

田

胃・畏・異・畝・界・塊・鬼・畿・魚・漁・鯨・衡・魂・細・思・醜・獸・暈・審・鮮・曾・僧・屠・増

憎・贈・戴・男・畜・蓄・町・田・畔・藩・番・卑・碑・鼻・苗・描・猫・富・膚・副・幅・福・奮・翻
魔・魅・勇・湧・翼・雷・略・留・虜・慮・瑠・累・罌

由

演・横・画・黄・軸・袖・苗・抽・笛・届・由・油

甲

押・甲・岬

申

申・伸・神・紳・搜・瘦

申は、象形文字でいなずまの形。伸は、イ十申（音符）の形声文字。神は、ネ十申（音符）の形声文字。紳は、糸十申（音符）の形声文字。搜・瘦は搜・瘦の新字体。

电

俺

俺の电の部分は申で、いなずまの形。

电

滝・電・竜

電の电の部分は申で、いなずまの形。滝・竜は灌・龍の新字体。

牛

解・牛・件

午

許・午

失

失・秩・迭・鉄

矢

挨・医・疑・擬・矯・凝・侯・候・喉・矢・疾・嫉・族・短・知・痴

力

加・架・賀・効・勸・勸・協・脅・勤・筋・勲・功・効・助・勝・勢・男・勅・努・動・働・勉・募・勃
務・霧・勇・湧・幼・虜・力・励・劣・勞・脇

刀

寡・拐・解・喫・契・潔・券・初・召・招・沼・昭・紹・詔・照・切・窃・超・刀・頒・貧・粉・紛・券
分・辺・賢・盆・留・瑠

甲

乘・剩・垂・唾・唾・郵

甲

華

示

尉・慰・款・禁・襟・祭・斎・際・察・擦・示・宗・崇・踪・奈・粟・漂・標・隸

示

斜・叙・徐・除・途・塗・余

弓

顎・誇

巧

汚

角

解・角・触

角は伝統的な楷書では **𠃉** と書かれることが多い。

冉

溝・構・購・講・再

溝・構・購・講は、溝・構・購・講の新字体。再は伝統的な楷書では **冉・冉** などと書かれる。

用

通・痛・備・用・踊

甫

浦・捕・哺・補・舗

𠃉

妻・凄

唐・糖

事

妻・唐・事ともに伝統的な楷書では **𠃉・唐・事** と突き出さない。

建・健・鍵・書・津・筆・律

肃

聿・肃は伝統的な楷書でも **聿・聿** と突き出す。

君・郡・群

淨・静・争

康・逮

庸

君、争、康、逮、庸は伝統的な楷書では **君・君、争・争、康・康、逮・逮、庸・庸** などと書き、突き出すことも突き出さないこともある。

鎌・兼・嫌・謙・廉

兼は伝統的な楷書では **兼・兼** などと書かれる。

丑

羞

羞は伝統的な楷書では **羞** などと書かれる。

𠃉

隱・穩・歸・急・侵・浸・寢・尋・雪・掃・当・婦

当は當の新字体。隱・穩・歸・急・侵・浸・寢・尋・雪・掃・婦はそれぞれ隱・穩・歸・急・侵・浸・寢・尋・雪・掃・婦の新字体。

当を除く隱・穩・歸・急・侵・浸・寢・尋・雪・掃・婦の「𠃉」の部分は、旧字体では「𠃉」と突き出していたが、どの字も伝統的な楷書では「𠃉」と書かれ、「𠃉」と書かれることはすくない。

巨

虐

虐は虐の新字体。「𠂔」の部分は「𠂔」と突き出していたが、伝統的な楷書では突き出して書かない。

史・吏・更

史・使・吏・更・梗・硬・便

史は**史**で中十又の会意文字。中は、神への祈りのことばを書きつけ、木の枝などに結びつけた形にかたどる。又は、手の意味。吏は**吏**で象形文字。官吏の象徴となる旗さおを手に持つ形。更は**更**で丙十支の会意文字。支は又十ト(音符)の形声文字。又は、右手の象形。梗は木十更(音符)の形声文字。硬は石十更(音符)の形声文字。便は人十更の会意文字。したがって史・吏・更の**𠂔**の部分は右手を表している。

𠂔

俛・劍・險・檢・驗

俛・劍・險・檢・驗はそれぞれ儉・劍・險・檢・驗の新字体。

兪は亼十兄十兄の会意文字。亼は合などに通じ、あわせるの意味。兄は口十儿の会意文字。口は、くちの意味。儿は、人の意味。また兄は、頭の大きな人の象形とも。

メ

歐・毆・刈・氣・希・凶・胸・区・驅・刹・殺・醜・刃・枢・爽・忍・認・惱・腦・璃・離

丸 斥・訴

人

以・効・該・骸・核・葛・刻・座・挫・傘・似・卒・肉・腐・頰

冊

慣・貫

母

悔・海・毒・梅・繁・敏・侮・母・每

曲

艶・曲・農・濃・豊

典

典

夕・歹

宛・移・怨・外・拶・残・死・殊・瞬・殉・殖・夕・葬・多・舞・夢・名・銘・隣・例・列・烈・裂・腕

夕

愛・曖・夏・各・格・閑・額・客・拋・後・降・唆・酸・終・俊・処・条・冬・麦・復・腹・複・覆・変
峰・蜂・縫・麵・憂・優・絡・落・酪・履・略・隆・陵・路・賂・露

久

畝・久

及

扱・及・吸・級

夕

液・夜

夕

祭・際・察・擦・然・燃

堇・堇

勤・謹・僅

常用漢字表・前書き・ㄅ字体についての解説・第2明朝体と筆写の楷書との関係について・3
筆写の楷書字形と印刷文字字形の違いが、字体の違いに及ぶもの・②点画の簡略化に関する例
に、僅 - 儻 (儻) とある。

具・具

具・惧

常用漢字表・前書き・ㄅ字体についての解説・第2明朝体と筆写の楷書との関係について・3
筆写の楷書字形と印刷文字字形の違いが、字体の違いに及ぶもの・③その他に、惧 - 惧
(惧) とある。

主 (主と異なる)

潔・喫・契

丈 (丈と異なる)

丈

且 (目と異なる)

宜・查・且・助・豊・阻・狙・祖・租・粗・組

助は力十且 (音符) の形声文字。

屯

純・屯・鈍・頓

為

為・偽

豸

猿・獲・狂・狹・獄・狩・狙・独・犯・猫・猛・猶・狽

声

遮・庶・席・渡・度

庶・席・度は伝統的な楷書では 庶・席・度 などと書かれる。